

創部のあとさき

第5期 吉田伸一

若かりし頃の淡い記憶を辿りながら重い筆をとってはみたが、今や半世紀に及ぶ昔の情景は記憶などといったものではなく、幼い頃の遠い原風景と入り交ったおぼろげなものとしてしか浮かんでこない。

約30年近い名古屋の生活を終えて東京勤務となった昭和60年、卒業後初めて母校を訪れラグビー部の練習風景に接した。その時、小生の心に焼き付いたものは、久方ぶりに眼にするラグビーの躍動感や汗と土の臭いであったことはいうまでもないが、それにも増して土にまみれることを体中で怖いと感ずるようになった自分の老化であり、そしてこの歳月がもたらした豊かさの違いであった。

終戦の昭和20年夏、千歳の生徒達は勤労動員先の職場や志願先の軍隊から次々と学窓に戻ってきた。しかし、生徒達を取り巻いていたものは、食糧を始めとした極度な物不足は勿論だが、何よりも一夜にして180度転換された新しい価値観への戸惑いであった。天下に名の通ったスパルタ教育で一糸乱れぬ規律を保った校風であっただけに、急変した価値観の前に多くの生徒達は虚脱感に襲われるだけであった。

そうした中で4期の相馬雄二氏(故人)、五島晋作氏、5期の角田夙彦君や小生などの有志が集まって「とにかく何か共通の目標を持てることに挑もうではないか」ということで、軍隊時代に経験した「斗球」をやろうということになった。相馬・五島・吉田の3名は海軍飛行予科練習生(予科練)の出身で、海軍では斗球が教科として取り入れられていた。それがラグビーである。

程なくして相当な賛同者(正確な記憶はないが1チームは充分編成可能)が集まり学校側へ申し入れるこ

ととなった。

しかし、そこにまっていた学校側の反応は、「現下の食糧事情等に於ては、ラグビーのような危険で過酷なスポーツは生徒になじまない」というものであったが、その本心は「予科練帰りの生徒を中心とした不穏な動き」という受け止め方であった。

そしてこの後、発揮されたのが相馬、五島両氏を中心とした発起人のねばりであった。

賛同者全員に学校側の反応を伝え、所期の目的を必ず実現するため雌伏して待とうと誓いあったうえで、外部への理解活動、ラグビーのルール勉強、基礎体力づくり、将来の部費づくりのためのアルバイトなど、まさに共通の目標を持った地下活動に入った。

当時お茶の水にあった岸体育記念館内のラグビー協会への陳情・東大ラグビーの名選手であった末広さん(末広巖太郎博士のお孫さんとのことで相馬さんの知人。成城に居住)や早稲田ラグビーOBの山本さん他2~3氏などへの支援要請をしたり、ヤミ物資の再生タイヤ(勿論自転車用)や新宿中村屋(相馬氏の父が社長)のお菓子を売って部費づくりをしたりと、厳しい中にも大きな希望と充実感を持った毎日であった。

明けて昭和21年(何月であったかは記憶にない)、我々の真意が伝わり学校側の許可がおりて、相馬キャプテン、五島副キャプテンのもとに千歳ラグビー部が発足した。

しかし、発足はしてみたもののグラウンドにゴールポストはない、肝心のボールは1個もない、練習ジャージやスパイクもないといった、今でいえばラグビーをするためのファンダメンタルズは皆無であった。

ラグビー協会と東大ラグビー部から中古のボール(確

か3個位)を貰ってきたが当時は粗悪品で、バスケットボールのようにふくらんでいた。それ以上ふくらまないように練習後は必ず空気を抜いたし、保革油がないために交替で唾をつけて磨いたため黒光りしていた。

部員(6期生のだけか)の知り合いで笹塚にあった材木屋から足場用の丸太を寄付して貰い、そこで借りた大八車で学校まで運んで念願のゴールポスト(東側の片面だけ?)も立った。シンボルのゴールポストの下で、その日のために特別に用意された(恐らく相馬氏が中村屋の工場から持ち出した材料)豚汁を飲んだのもつかしい思い出である。

自分達の意思と力で発足させたラグビー部であるだけに、部活動、とりわけ練習にかける熱意はすさまじく、西宮へ行こう(当時の全国大会は西宮)、天王寺に勝とう(我々の耳には何故か天王寺が名門校としてきこえていた)といい交しながら、八幡山の明大グラウンド、東伏見の早大グラウンドにも足を運びながら血のにじむ練習に明け暮れた。

当時ラグビーをやる中学校は少なかったが、それでも保善・学習院・成城・横浜商業などと練習試合を繰り返すうちに、千歳ラグビーの名は関東一円に広まっていった。

目白の学習院のグラウンドで同校に大勝したとき、冬なのに我々はシャワーを使わず、冷たい水道の水で手足だけを洗ったことや、その帰り道に応援に来ていた学習院の女子部の生徒が「千歳は強いけどそばにいと臭いわね」とささやくのを耳にして、みじめな思いをしたのも懐かしい。

小柄な選手ばかりであったため、タックルが何よりの

武器として練習の重点を置いた結果、どの選手も必殺のタックルをするということが、フォワードのボール獲得力の高さやバックスの走力と並んで千歳ラグビーの評価を高めたものである。

校内でのラグビー人気も素晴らしく、昭和22年頃には部員も50名を越え、「ひばり」「エリス」「サザンクロス」の3チームに分けて部内で競いあったものである。

昭和23年秋、秩父宮ラグビー場で関東地区決勝戦が行われた。その対戦相手こそこれまでどうしても勝てなかった高崎高校であったが、校長以下殆どの生徒が応援に駆けつけた中で、1点差か1トライ差か覚えていないが接戦をものにして悲願の全国大会出場の運びとなった。

日刊スポーツ紙に、「グラウンドさえ良ければ、高校生離れしたフォワードとバックスを擁する千歳高校がダークホース中のダークホース」と評されて、気を強くして臨んだ第一回全国高等学校ラグビー大会であったが、無情にも12月30日から降り続いた雨は当日(1月1日)になっても止まず、水田のようになった秩父宮ラグビー場では四条畷高校との決定的な重量差は如何ともしようがなく、3トライ9点差で敗退した。

翌日の日刊スポーツ紙の見出しは、勝者ではなく敗者の「千歳高校取る!!」であった。

ラグビーに汗するバックグラウンドは、貧困を極めた半世紀前から夢のような豊かさの現代へ様変わりしたが、その根底で不屈の精神力が要求されるという厳しさは、昔も今も少しも変わっていないことと実感させられた。

<千歳中学ラグビー部歴戦の記録>

（ 第 5 期
同期生からのことば ）

○ラグビー選別試合
昭和21年2月8日
本校グラウンド

5年生		4年生
2	(T)	0
0	(G)	0
0	(PG)	0
6		0

○対校試合：都立化工
昭和21年5月10日
本校グラウンド

化 工		千 歳
4	(T)	1
2	(G)	0
16		3

千歳FWの「山だ」の想い出

千歳高校は、昭和24年1月に行われた第28回大会（学制改革により第一回高校大会となる）に、関東代表として晴れの舞台東京ラグビー場（現秩父宮ラグビー場）に出場した。

当時は全国8チーム（四条畷高・千歳高・脇町高・一宮高・秋田工高・修猷館高・北見高・崇徳高）の地区代表で戦ったが、千歳が一回戦で当り敗れた四条畷高（0対9）が決勝まで進み、東北の雄秋田工高に13対3で敗れ準優勝した年であった。当時の記録を見ると8チームの実力は伯仲していたことがうかがわれる。

その前年の昭和23年の大会では、惜しくも決勝で敗れ代表になれなかったことから、中学5年終了でFWから若林、石田、宮崎等のレギュラーが卒業したが、ボックスは幸いにも吉田伸一が新制高校へ行くこととなり、ハーフも川鍋が残った。そこでFWでは誰か一人残ることとなったが、吉田から中学5年で旧制大学へ行っても翌年新制高校から新制大学へ進んでも卒業するときは一緒だぞといわれ、「よしわかった」ということで、私が新制高校へ行くことしボックスに吉田、ハーフに川鍋、FWに私（角田）と二人の五期生が残り雪辱を期すこととなった。

こうなった以上何としても代表になり全国大会に出場しなければ意味がないと、学業そっちのけで文字通り泥まみれの猛練習に明け暮れた。

当時千歳のボックスには超高校級の俊足といわれた吉田、藤江の二人のトライゲッターがおり、ハーフ団も球に食らいつき、パスする川鍋とステップワークの巧みなケン坊こと木村茂（故人）がおりFWが球をとってボックスを走らせれば、得点力が高かった。

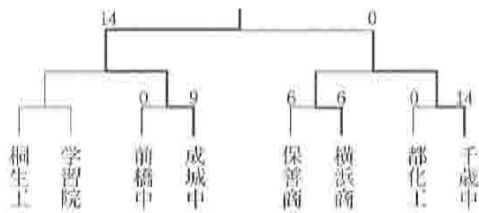
また、得点に結び付けるにはセットスクラム（現在も同一）より、ルーズスクラム（現在のラック）の方がチャンスが多いのはいうまでもない。

そこでダウンボールされた球を敵ボール、味方ボールを問わず奪うためどうしたら良いか工夫することになった。FWはダウンボールされた球に向かって突っ込んで行くのであるが、一人より二人、二人より三人と敵より一人でも多くルーズに突っ込んだほうが球の獲得率が高まるわけであり、FW全員をチャンスボールに集中させるにはどうしたら良いかを皆で相談した結果、チャンスボールにはFWリーダーで声のでかい角田が「山だ」と怒鳴ることにした。

この声に向けてFW全員がバックを組んで頭から猛然と突っ込む練習を繰り返し繰り返した。

その結果実戦で敵ゴール前のルーズで一声「山だ」と声がかかると目の色を変えて、ボールに頭から突っ込むFWの球出しのおかげでボックスを走らせることが出来、強敵を次々と倒し、関東代表の決勝戦で宿敵高崎高校を破り、晴れの栄冠を手にする事ができた。

○全国大会関東予選
昭和21年12月2日～22日 八幡山明大グラウンド（22日）



○中等ラグビートーナメント
昭和22年9月28日
八幡山明大グラウンド

保 善		千 歳
1	(T)	7
0	(G)	1
3		26

○対校試合：学習院
昭和22年10月5日
八幡山明大グラウンド

学習院		千 歳
5	(T)	1
0	(G)	1
0	(PG)	0
15		8

○対校試合：横浜商
昭和22年12月4日
東京ラグビー場

横浜商		千 歳
6	(T)	0
0	(G)	0
18		0

○対校試合：都立化工
昭和23年1月23日

化 工		千 歳
2	(T)	1
0	(G)	0
0	(PG)	0
6		3

○第28回全国大会 予選1回戦

昭和24年1月1日 秩父宮ラグビー場 暇 (9) —— (0) 千歳

当時の千歳のFWは平均体重60キロ前後だと思うが、この小型FWで他校に引けを取らぬFW戦ができたのは「山だ」が大いにチームの気持ちと集中力を発揮させるのに役だったのではないかと今でも想っている。

また、今でもこの一回戦は悪天候で泥濘のため自慢のボックスを走らせることができず、後半ついに3トライされた記憶であり、「お天気だったらなあ」と今でも悔やんでいるところである。 角田 紘彦

戦後予科練の先輩が復員帰校致し、たまたま五期生であった私へ、創部者故・相馬雄二氏から体力もあり、入部を勧められ、故・花形敬君と調布飛行場隣接の相馬宅に招待され、カレーライスを祖母より馳走され入部した者であった。

私は当時、自宅が多い保有地であった為、農作業等にて足腰が強かった為、花形君とロックのポジションを与えられ、対校試合に当時必ず出た者でありました。

当時、早大・明大の先輩が千歳へコーチとして来校し謝礼として、校庭で作った芋を持って行って貰ったものです。

相馬氏の父親から初めて皮製のスパイクをプレゼントされ感謝すると共に、試合の前夜、私の姉に徹夜でストッキングを編んで貰いチャージも自分で染色し、chitoseのマークをぬい付け一応の身なりを整えた頃の事等。

正に物不足時代の趨勢に偲ぶ事が出来ます。

益々の御発展を祈ります。

新井 満